



図7 飼育水温の変化

### 3. 要約

- 1) 飼育水1トン当たり鶏糞100gを施肥する場合には、施肥後1週間ないし10日後に種苗の池入れを行えば良い。また、トン当たり200gの施肥を行なう場合は池入まで15日以上おく必要があると思われる。
- 2) 無施肥区と施肥区(100g/t)では1カ月間の増重倍率で約2倍の差があり、また施肥区では餌料効率が100%を越えるなど、ウシエビ種苗の成長に対する施肥の効果は明らかである。しかし、歩留りに関しては影響は見られなかった。
- 3) 天然親エビを用いて、約30万尾の種苗を生産した。また、ノープリウスからの生残率は54~79%、単位水量当たりの生産尾数は19~24千尾/tと高歩留りを示した飼育水槽があった。
- 4) ミシスからポストラーバ初期にかけて、カビによる大量への死が発生した。
- 5) 眼柄切除によって得た卵のふ化率は7%と低かったが、約6,500尾の稚エビを生産した。
- 6) 眼柄切除による成熟促進では、計6尾がステージⅢまで成熟し、うち2尾が産卵した。しかし、結果は不安定で眼柄切除以前の親エビの仕立方が重要と思われる。
- 7) 当水産試験場内の地下水を利用した越冬は10g以下のエビでは効果がある。
- 8) ビニールハウスを用いた越冬試験では歩留り、成長ともに良く、十分越冬が可能である。
- 9) 沖縄産のウシエビは台湾産のものより、低水温に強いように思われる。